

## インドシナ道中記

2018年4月17日から24日までカンボジアとヴェトナムに行ってきました。今回はJTBのパック旅行でしたから、余裕のあるスケジュールである代わりに、わたしの思う通りの時間の使い方はできませんでした。それでも現地に立って現地の匂いを嗅ぎ、日差しと喧騒の中に身を置き、現地でなければ食べられないものを食べられれば、わたしの五感は何かを感じるだろうと思っておいたのです。高々5日ほどの駆け足訪問ではありますが、現地でわたしの体が感じたものが、消えないうちにせめて旅行記にして残しておこうと思います。

### 2. アンコールワット暮色



午後4時30分ごろのアンコールワット、太陽を正面から浴びています。

わたしのアンコールワットへの思いには、いくつかの段階があります。最も古いのは小学生の頃、何の物語だったかは忘れてしまったのですが、密林に呑み込まれてしまった寺院らしき場所の映像に魅かれたことを今でも鮮明に思い出すことができます。それからことあるごとにカンボジアの密林の中にあるという朽ちかけた寺院のことが気になっていました。

次にアンコールワットがわたしの脳裏に浮かぶようになったのは20代の頃でした。1975年にベトナム戦争が終結したと思ったら、それが隣国であるカンボジアに飛び火

して内戦状態になり、とても人間業とは思えない殺戮と破壊が同じ民族同士で応酬されるようになった時も、彼の国の人々の身の上に思いを馳せると同時に、宗教を否定する共産主義者たちが密林の寺院にどんな仕打ちを仕掛けるかが気になって仕方ありませんでした。職業柄、メコン川とトンレサップ湖の魚類とその特殊な生態にも関心はありましたが、やはり子どもの頃の鮮烈な印象のせいで、アンコールワットへの思いの方が強かったのです。

とどめを刺されたのはカンボジアを吹き荒れたポルポトの嵐も収まった 1999 年になってからです。一ノ瀬泰三という戦場カメラマンがいます。彼の死と彼の「地雷を踏んだらさようなら」という本、そしてそれが映画化されたことで、アンコールワットはわたしの心に深く入り込んで出ていこうとしなくなりました。

一ノ瀬泰三氏は 1947 年（昭和 22 年）11 月 1 日に佐賀県武雄市で生まれた日本の報道写真家です。1972 年 3 月、泥沼化したベトナム戦争が飛び火し、内乱状態が激化していた隣国のカンボジアに入国して、以後ベトナム戦争、カンボジア内戦を取材しています。カンボジア入国以後、クメール・ルージュの支配下に有ったアンコールワット遺跡への、外国人報道写真家として一番乗りを目指し、1973 年 11 月、「いい写真が撮れたら持って行きます。もし地雷を踏んだらサヨウナラ」と友人宛に手紙を残し、単身アンコールワットへ潜入し、そのまま消息を絶ったのです。9 年後の 1982 年、アンコールワット北東部のプラダックという村で遺体が発見されました。後に 1973 年 11 月 22 日もしくは 23 日にはクメール・ルージュによって「処刑」されていたことが判明しています。つまり彼は潜入直後に亡くなっていたのです。

「地雷を踏んだらサヨウナラ」は彼が残した写真や書簡などをまとめて 1978 年に出版された写真・書簡集で、1985 年に文庫化され、さらにそれを原作として 1999 年に映画化され、わたしはそれを見たのです。映画は 1985 年にも「泰造」が公開されているようですが、そちらの方はわたしは見えていません。

彼が一番乗りを目指したクメール・ルージュの支配するアンコールワットを、生前に見ることができたかどうかは想像することしかできません。プラダック村はシェムリアップのホテルからバンテアイスレイという遺跡に向かうときに通ったのですが、シェムリアップから北東に 20 キロほどのところにあり、アンコールワットはそこから西南西に直線距離で 8~9 キロほど離れています。ここには一ノ瀬氏の墓があるそうですが、わたしたちはツアーのプログラムというベルトコンベアーに乗せられていて、途中下車してお参りすることはできませんでした。

ともあれアンコールワットの全景を見るのは日の出前と夕暮れ時が良いということで、夜明け前に行って日の出とともに蓮池に映る姿を見、夕暮れ時にもう一度戻りました。アンコールワットは寺院ではあるのですが、王の死後の冥福を祈るための施設でもあるため、西方浄土に向かって建てられています。従って正面側から見ようとすると朝陽はアンコールワットの向こう側に昇って来るのです。つまり逆光になるため遺跡の繊細な色合いなどが見えないのです。そこで夕暮れ時に今度は正面から日の光を浴びている遺跡を見て、この遺跡の素晴らしさを再確認しようというわけです。

早朝はあいにくの曇り空で、日の出を拝むことはできませんでしたが、夕刻のアンコールワットは傾きかけた太陽の光を浴びて、正しくフットライトを浴びた主役の風格を見せ

てくれました。今回の短い旅のハイライトは十分に堪能させてもらったというわけです。



もう太陽は昇ってしまったのですが、この日は雲の向こうに隠れたまま、アンコールワットの尖塔越しに差し込む光の矢を見ることはできませんでした。



蓮池の周りは日の出を待ち望む観光客でいっぱいです。遺跡の歴史に思いを巡らす情緒など望むべくもありません。



正面通路の向かって左側にある経蔵は今、日本の協力で修復中である旨書かれた看板が麗々しく建てられていました。